

第1回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

準1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30) 1~20は音読み、21~30は訓読みである。

- 1 病人用の唾壺が置いてあった。
2 内に狼戾の心を秘していた。
3 すでに屢述したとおりである。
4 弄瓦の御慶を申し上げる。
5 厩舎の清掃を任せられた。
6 靈前に膝行して焼香する。
7 鉄桶水を漏らさぬ堅陣を誇る。
8 孜孜として学問に励む。
9 しきりに諺語を引用する。
10 一見して這裡の消息を合点した。
11 雪の川で蓑笠の翁が舟を操る。
12 輔弼の大任を命じられた。
13 旧暦三月三日は上巳の節句である。
14 華麗な修辞で絢飾する。
15 鷹隼高く飛んで天に戻る。
16 垂簾の政を執ること十年に及んだ。
17 鹿砦を設けて侵入を防ぐ。
18 算を乱して潰走した。
19 以後杵臼の交わりを結んだ。
20 夕嵐に飛鳥還る。
21 鐘をかわせて右に出る者はいない。
22 潤目鱗は干物にして美味である。
23 牛頭馬頭の獄卒に苛まれる。
24 山城のまわりに空壕をめぐらす。
25 まことに姦しいかぎりである。
26 百尺許りの椴松が群落をなしている。
27 今日はいやに遜っている。
28 いっしか心の澱が消えていた。
29 何かと柵が多くて自由がきかない。
30 毛は以て風寒を禦ぐべし。

(二) 次の傍線部分は常用漢字である。その表外の読みをひらがなで記せ。

- 1 行動を共にすることを盟う。
2 消費者の需めに応える。
3 遍く天下に知れ渡っている。
4 感情が暴発して他人の心を害なう。
5 風に薄の穂が戦ぐ。
6 相手の言い分を諾う。
7 ふとしたことから好を通じた。
8 茶室に擬えた造りになっている。
9 実しやかに述べ立てる。
10 能う限りお力添えする。

(三) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを送りがなに注意してひらがなで記せ。(10)

健勝... 勝れる ↓ けんしょうすぐ

- ア 1 親疏... 2 疏い
イ 3 徽言... 4 徽い
ウ 5 鍛冶... 6 冶る
エ 7 莫逆... 8 莫い
オ 9 尤人... 10 尤める

(四) 次の各組の二文の()には共通する漢字が入る。その読みを後の()から選び、常用漢字(一字)で記せ。(10)

- 1 三十分の間に(1)飯する。 ()
現場の惨状に(1)驚する。 ()
舌(2)火を吐く。 ()
(2)坐して読経する。 ()
2 酔(3)にも程がある。 ()
(3)騒の巷をさ迷う。 ()
3 (4)眉の栄に浴する。 ()
(4)趨の上御礼申し上げます。 ()
4 際限もなく長(5)舌をふるう。 ()
(5)量にして大度の人物である。 ()
5 かん・きつ・きよう・こう
せい・たん・はい・ふん

(五) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)

- 1 紛争解決のシヨコウが見えてきた。
2 会社のテイカンを精読する。
3 呆れる程カイシヨウのない男だった。
4 窮地に陥った友人をカバウ。
5 何をするのもオツクウだった。
6 もいだリングを丸かじりする。
7 縦書きのケイシにペンで手紙を書く。
8 年を取ってヒガみっぽくなった。
9 初夏の陽がサンサンと降りそそぐ。
10 交通事故でケイツイを痛めた。
11 リユウチヨウな英語で受け答える。
12 鳩が餌をツイバむ。
13 身をテイして守り抜いた。
14 札束をワシヅカみにして逃げた。
15 さまざまな利害関係がサクソウする。
16 ともすれば家業をナイガシロにした。
17 古人のソウハクを嘗める。
18 見る見る顔面ソウハクとなった。
19 長旅にウンできた。
20 傷口がウンできた。

準1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

(六) 次の各文にまちがって使われている同じ音訓の漢字が一字ある。上に誤字を、下に正しい漢字を記せ。

- 1 遙か蒙古から飛来した砂塵が全天を覆い日中にして既に黄混を思わせた。
2 難敵をこそ欣び迎えんとする強靱な精神力が彼の全身から横逸していた。
3 水仙は蒙春酷寒の候に開花し、姿は清楚で香り良く観賞用に栽植される。
4 大晦日の夜十二時、罪業消滅、凡悩除去を願い除夜の鐘を百八声鳴らす。
5 獅子は悪益災禍を払う霊獣とされ新年を祝う獅子舞の芸能が各地に残る。

(七) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1 次の四字熟語の(1~10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。(20)
(1) 猛進 焚書 (6)
(2) 万里 氣息 (7)
(3) 地久 李下 (8)
(4) 自煎 吉日 (9)
(5) 瓢飲 堯風 (10)

問2 次の1~5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)
1 苦学のたとえ。
2 平凡で取り柄がない。
3 願望の実現には有効な方策を要する。
4 勢いが非常に盛んなさま。
5 過ちを巧妙に修整する。

衣繡夜行・臨淵羨魚・浮花浪蕊
旭日昇天・落筆点蠅・邑犬群吠
改弦易轍・穿壁引光

(八) 次の1~5の対義語、6~10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

対義語 緊張 突如
正味 聴許
快諾 腹心
創業 雌雄
凶兆 鳳雛
類義語

いんきよ・きりんじ・ここう
こつぜん・しかん・しゆせい
しゆんきよ・ずいしょう・ひんば
ふうたい

(九) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分を選択して記せ。(20)

- 1 シランの室に入るが如し。
2 ヒヨウタン相容れず。
3 晩学といえどもセキガクに昇る。
4 ヒシヅルほど子ができる。
5 コウゼンの気を養う。
6 越鳥南枝に巣く、コバ北風にいななく。
7 カニは甲羅に似せて穴を掘る。
8 冠履を貴んでトウソクを忘る。
9 破れ鍋にトシ蓋。
10 センダンは双葉より芳し。

(十) 文章中の傍線(1~5)のカタカナを漢字に直し、波線(ア~コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。(20)

A はじめ隠居が件の小冊子を公にするや、褒貶の評四方に起る。或いは曰く、政事を談ずるの必要を余所にして、かかるくだらぬ戯述をなす。実に贅勞の極というべし。寧ろ政事小説を翻訳するの有益なるに如かずと。或いは曰く、件の小冊子に載する所は、三四年以前の書生の情態にして、方今の書生の情態にあらず。方今の書生何ぞ斯くの如くユウトウにして懦弱ならんと。或いは曰く、本篇に載する所は、悉皆作者自身の経歴なるべし。文学士の履歴果たして斯くの如き歟。誠に恐ろ感心なりと。其の他是非の批評もごもいでたり。隠居これらの評判を聴くや、一たびは世に神史眼の無きに驚き、一たびは美術の衰えたるを憾み、一たびは小説家の迷惑を感じぬ。請う一々に次を逐うて、其の然る所以を説明せん。

近來の小説家の著述にも、下流の様を写せしもの頗る多かり。中には密売女の情態を写したる者もあり、キンチャク切りの内幕を穿ちたる者もありて、脚色もおおき近俗にして、且つ文句さえもいやしげなるあり。但し其の意匠の存する所は、専ら情態を写すにありて、一向淫靡なる時好に媚びすさみて、ヤヒをかたるにあらず。

(坪内逍遙「当世書生氣質」より)
B いやしくも沼南は信誼を重んずる天下の士である。新聞社を他へ譲り渡すの止むを得ない事情を訴えたかなり長い手紙を印刷もせず代筆でもなく一々自筆でシタタめて何十通(あるいはそれ以上)も配ったのは大抵じゃなかつたらう。平生の知己に対して進退行蔵を公明にする態度は間然する処なく、我々後進は余り鄭重過ぎる通告に痛み入った。

沼南は廢娼を最後の使命として闘ったが、若い時には相応に折花攀柳の風流に遊んだものだ。この頃の或る新聞に、沼南が流連して馴染みの女が病気で臥しているチントウにいつまでも付き添って手厚く看護したという逸事が載っている。

(内田魯庵「思い出す人々」より)

氏名